

II レクリエーション

1. 調査目的

武庫川峡谷においてハイキングコースとして利用されている廃線敷や桜の園、水辺空間等を利用したレクリエーション活動の実態を調査し、新規ダム建設による影響とその対策を検討する。

2. 調査内容

峡谷の利用実態を把握し、レクリエーション空間としての機能への影響を整理するとともに、ダム堤体が遮断する廃線敷への対応策を含め、影響への対策を検討する。

3. 調査結果

(1) 利用者数の現状

峡谷の利用者数の現状は以下に示すとおりである。今回と平成7年では、調査時期に多少の差異はあるが、傾向として利用者数は増加していると考えられる。

表. 地点別方面別利用者数 (平成19年度)

調査地点	方面	利用者数(人/12hr: 7~19時)		
		5月3日	8月18日	11月23日
St. 1 (エントランス広場)	武田尾方面へ	1,017	403	1,525
	生瀬方面へ	356	60	823
St. 2 (名塩橋)	武田尾方面へ	874	394	975
	生瀬方面へ	221	30	372
St. 3 (桜の園エントランス部)	入園者数	126	46	616
	退園者数	164	24	597

※5月3日: ゴールデンウィーク連休初日

※8月18日: 夏休み期間中

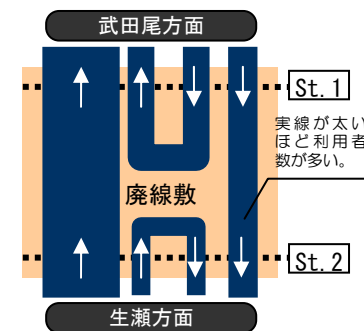
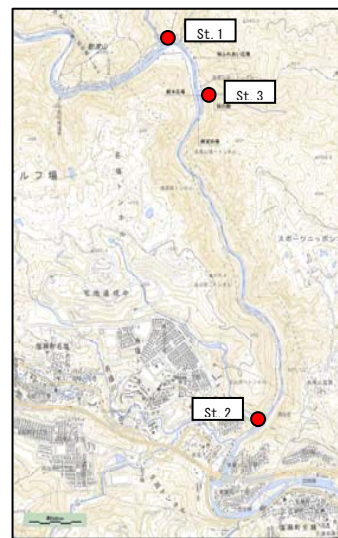
※11月23日: 3連休の初日

表. 地点別方面別利用者数 (平成7年度)

調査地点	方面	利用者数(人/12hr: 7~19時)	
		5月6日	11月26日
今回の St. 1 とほぼ同じ地点	武田尾方面へ	261	759
	生瀬方面へ	125	356
今回の St. 2 とほぼ同じ地点	武田尾方面へ	267	573
	生瀬方面へ	148	169

※「武庫川ダム環境調査」(兵庫県、平成8年3月)より作成

- 幅広い年齢層の利用者がみられ、10~20代のカップル、20~40代の親子連れなど、若い世代の利用も目立った。
- 廃線敷における利用者の一方向への移動は、生瀬方面から武田尾方面へと抜ける人々が大半であった。武田尾方面からの利用者は、途中の桜の園や付随する施設などで時間を過ごし、その後は、再び武田尾方面へと帰ってゆく人が多い。
- 一方、生瀬方面から武田尾方面へと抜けず、途中で引き返す利用者は、日常的な散歩のルートとして



いる近隣住民が主体である可能性が高い。

(2) 利用の種別の現状

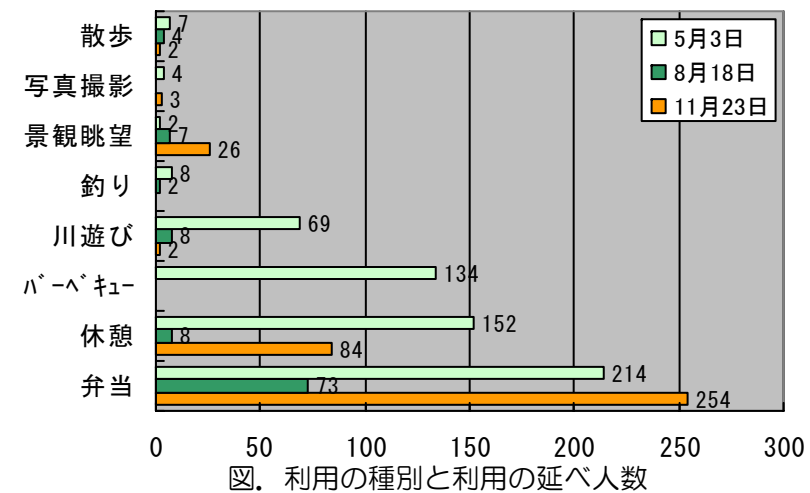
峡谷の利用の種別の現状は、以下に示すとおりである。

利用で最も多かったのは、季節によらず、弁当=昼食をとる場としての利用であり、エントランス広場、桜ふれあい広場、親水広場、展望広場などのほか、廃線敷脇の木陰や河原などが利用されている。

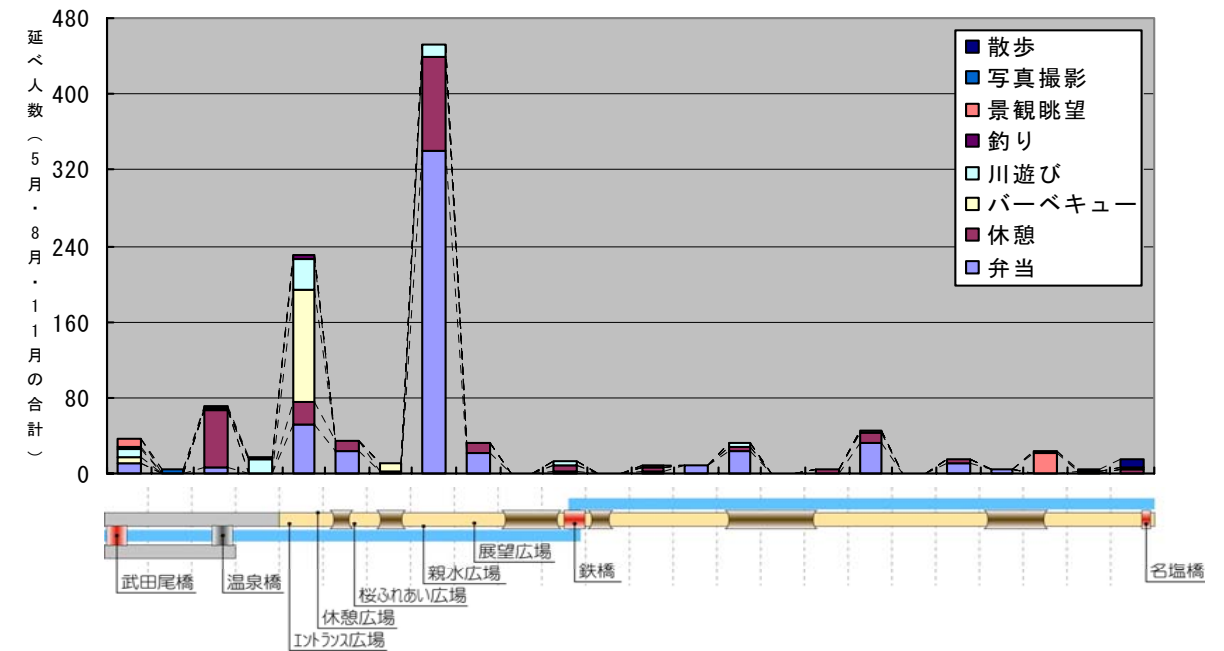
*移動する利用者の利用目的を判定することは難しいため、利用者が足を止め一定時間を過ごす行為に着目して記録した。

このため、移動そのものが利用目的であるハイキングなどは記録の対象外としている。

① 利用の種別と利用の延べ人数



② 利用の分布



※調査区間(武田尾橋~生瀬橋間)を24区画して整理した、区画ごとの利用の種別及び利用の延べ人数

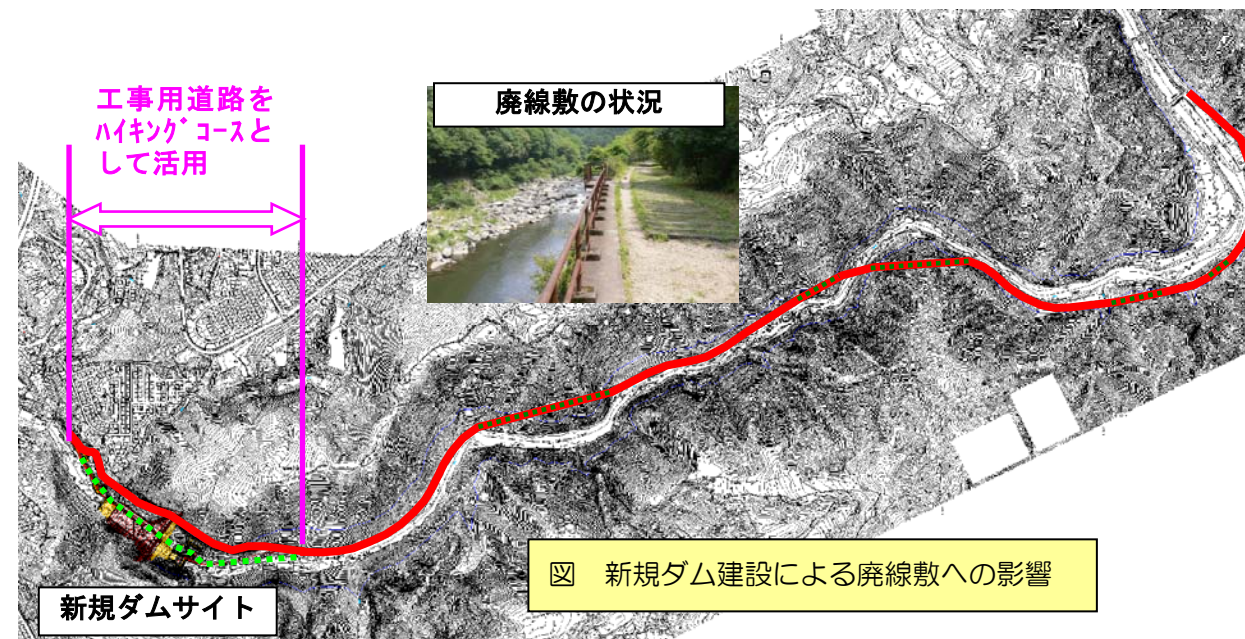
図. 利用の種別と利用の延べ人数

- バーベキュー、川遊び、釣りなどは弁当や休憩と異なり、他の利用に付随している可能性は低く、ハイキングと同様に来訪の主たる目的となっている。中でもバーベキュー、川遊びは、春季に限定されるが利用例は多い。ただし、前項の「利用者数の現状」の調査結果と考え合わせると、峡谷の利用は

ハイキングが最も多く、バーベキューや川遊びが、それに次いでいる。

(3) 廃線敷への対応策

新規ダムを建設した場合、ダムサイト付近は、ダム本体により廃線敷が遮断される。前述の調査結果で明らかになったとおり、武庫川峡谷は多くの人々が多様な利用をしていることから、廃線敷をできるだけ現在と同様に利用できるよう配慮する。なお、遮断されるダムサイト付近の廃線敷は、ダム本体を迂回する工事用道路を利用することが考えられる。



4. まとめ

- ・峡谷の利用者数は、過年度比で増加しており、利用の種別、場所に差異はあるものの、峡谷が全体として余暇あるいは日常生活の様々なニーズに応えている。事業を実施する際には、こうした利用への配慮が必要である。
- ・新規ダムを建設する場合には、現在の廃線敷がハイキングコースとして利用されている機能を維持するよう配慮する。但し、洪水時には貯水池内に洪水が貯まり、廃線敷が冠水しやすくなることから、利用者の安全を確保するため、①廃線敷の利用制限、②洪水時の利用者の避難対策などの安全対策について今後検討する。

今回の調査結果については、今後、河川審議会環境部会の評価を受けることとしており、その際の意見を踏まえ引き続き検討を進めていく。